

社会人大学院における修士論文作成プロセスの可視化 ー働きながら学ぶ現職技術者を対象とした事例分析ー

要旨

本研究は技術者の継続学習の「場」として、社会人大学院の有効な活用方法を学ぶ立場から見出すための方策の一つとして、対面形式の研究ゼミに着目した。筆者自身が社会人大学院のゼミ生として修士論文を作成しながら、同時に他のゼミ生への観察をつうじて、修士論文作成プロセスの可視化を試行した。以下に研究成果の概要を示す。

先行研究のレビューと可視化に向けたフレームワークの設定

社会人大学院生を対象とした修士論文指導に関する先行研究のレビューを行った。その結果、①研究指導については、今でもほとんど、そのプロセスが見えないという意味で、ブラックボックス状況に置かれていること。②入学時点で社会人大学生は学術論文の書き方に関する知識・スキルが不足していることなどが明らかになった。

そこで、修士論文作成プロセスを可視化するための分析手法（以下フレームワーク）として、知識創造のプロセス（以下 SECI モデル）を適用した。

現職技術者のゼミ生を対象とした事例分析

X 通信制大学院 Y 研究ゼミに所属する現職技術者を調査対象とした事例分析をおこなうこととし、SECI モデルにそって、具体的なデータ収集及びその分析方法を決定した。

ゼミ生の現職技術者が修士論文を作成するプロセスを以下の4つの SECI モデルにそって分析し、可視化をおこなった。

- ① 共同化：研究テーマを設定し大学院へ入学するまでの動機・背景
- ② 表出化：ゼミ活動を通じた研究テーマ・研究方法の変遷過程
- ③ 連結化：現職技術者の特性を活かした ICT 活用による修士論文作成過程
- ④ 内面化：研究成果の実務への展開に向けての試行過程

上記 SECI モデルによる分析結果を先行研究や成人の学習理論を参照しながら考察を行った。

以上、X 通信制大学院 Y 研究ゼミの現職技術者を対象とした事例分析を行った結果、限られたサンプル数、2年弱の期間という限定された条件の中で、以下の知見が得られた。

- ① 現職技術者のゼミ生が指導教員から研究指導を受けながら、修士論文を作成するプロセスの一端を明らかにすることができた。
- ② その際、フレームワークとして設定した SECI モデルを適用することによって、修士論文作成プロセスの可視化がうまく表現できた。

今後の課題としては、大学院で得た学問知を職場の実務に適用し、「内面化」を実行することにある。修了後、本研究成果を職場の実務への適用や後進の指導などをつうじて、自分自身のものとして暗黙知化していきたい。そして、次の SECI モデルに展開し、SECI モデルを常にスパイラルアップ状に繰り返していく第一歩としたい。

本研究の成果が、現在はほんの一部に限定されている現職技術者に対して、働きながら大学院で学ぶ機会を一層広げることにも寄与する一助になることを期待したい。